

北海道のジャガイモを愛した2人の男爵

西尾 敏彦

イサベラ・バードがみた七重官園

明治11年(1878)の夏のこと。1人のイギリス人女性が物情騒然たる開拓時代の北海道を訪れた。女性旅行家のイザベラ・バードである。彼女の旅行記『日本奥地紀行』¹⁾は、当時の東北・北海道の農村事情を知る貴重な資料だが、その北海道旅行の最初の項に、つぎのような1節がある。

「山道を15マイル登って行くと、七飯という整然とした洋風の村がりっぱな農作物に囲まれている。ここは政庁が新風土馴化その他の農事試験をしているところの一つである」

ここで彼女が目にした「農事試験をしているところ」とは、わが国初の農業試験場「七重官園」であった。

バードは約1ヶ月にわたる北海道旅行を終えて帰途も函館近くの農村を通るが、ここでもつぎのように記している。

「まわりには野菜や花が驚くほど多く栽培されていた。これは開拓使政庁によって七重農事試験場から豊富に支給される種子から育てられたものである」

七重官園を発信基地として、開拓時代の北海道各地に欧米の新しい農作物・農法が浸透していったさまがまざまざと浮かんでくる。たぶんバードのみた「野菜」には海外から導入されたばかりのジャガイモ品種も含まれていたに違いない。

七重官園のジャガイモ栽培

七重官園は明治3年(1869)、開拓使によって函館郊外の七重村(現在は七飯町)に開設された。最初は七重開墾場と呼ばれ、その後農業試験場、勸業試験場などと、つぎつぎ呼称は変更されるが、ここでは「七重官園」の通称で通すことにしよう。七重官園は最盛期に田畑70ha、牧場316ha、ほかに広大な牧羊場・桑園をもち、職員も研修生・雇を含めて160人余を擁した。同じ時期に内務省勸業寮が現在の東京都新宿区「新宿御苑」の位置に設けた「内藤新宿試験場」と双璧をなす国立試験場であった。

七重官園では稲麦をはじめ、各種の畑作物・野菜など、内外の農作物の試作が精力的に行われた。もちろん稲作がむずかしいと考えられていた当時の北海道である。主食に代わるジャガイモの試作にはとくに力



七重小学校前に立つ旧七重官園の案内板

を入れていた。当然、海外の多数の品種が導入され、その適応性が検討されている。

北海道庁の記録²⁾によると、明治7～10年(1874～77)の間に、じつにジャガイモ89品種を海外から輸入し、七重官園、札幌農学校などで試作を行っている。ここで選ばれたアメリカの品種「アーリーローズ Early Rose (明治6年導入、日本名:「夏薯」「薄赤」)」「スノーフレーキ Snow Flake (明治8年導入、日本名:雪形(ゆきがた))」はとくに好評で、明治・大正にかけて道内各地で広く栽培された。

ところで、七重官園のジャガイモの栽培面積・収量はどの程度だったろうか。『七飯町史』³⁾によると、明治6年(1873)から明治14年(1881)にかけて、七重官園では0.9～4.3haのジャガイモが栽培されている。同じ表に総収穫量も記録されているので単純計算すると、栽培初年こそ60kg/10aと低収だったが、まもなく800kg/10a以上の多収が得られるようになり、最高1350kg/10aに達している。ジャガイモに関する最初の統計、明治11年(1878)の全国平均単収が340kg/10aだから、かなりの多収とってよいだろう。

「イモ判官」湯地定基

ところで、七重官園の場長を湯地定基^{ゆちさだもと}とった。湯地は旧薩摩藩士、藩命で渡米、のちに札幌農学校建学の祖となったクラークが学長のマサチューセッツ州立農科大学で農政学を学んだ。

その縁もあったのだろう。湯地は明治8年(1875)には七重官園に着任し、明治15年(1882)の開拓使廃止まで7年間在任している。東京の内藤新宿試験場は場長が定

められていなかったようなので、彼こそ「わが国農業試験場長第1号」とってよいだろう。

官園退任後の湯地は、この時代に4年間だけ存在した根室県の県令に就任する。アメリカでクラークに農政学を学んだ彼にとって、根室はまさに実践の場だったのだろう。地元の農林水産業者の代表を招き、「勸業諮問会議」を開催、とくに水産・畜産の振興に尽くしている⁴⁾。

もちろんジャガイモを忘れてはいない。当時の根室県は、稲麦はもちろん野菜もあまりとれない最果ての地であった。湯地はここでジャガイモの栽培に力を入れ、入植農家1戸1戸に種イモを配って廻り、また農具を与えるなどして栽培を奨励している。きっと種イモの調達には七重官園の経験が活かされたことだろう。湯地のジャガイモ奨励はかなり強引だったようで、最初は農家に抵抗感があったようだが、やがて冬季の食料として重用されるようになった。人びとは彼に「イモ判官」の愛称を奉り、敬意を表したという⁵⁾。

湯地はその後、道庁にもどり土木開発を担当、道路の建設、農地の整備など北海道開発の陣頭に立つ。退官後は夕張郡角田村(現在の栗山町)に湯地農場を開設し、欧米式の牧畜業を導入した混同農業を実践している。晩年は男爵に叙せられ、貴族院議員にも勅選された。栗山町の彼の農場所在地は、現在も「湯地」の地名が残り、農場の建物も保存されている。

湯地が去った後の七重官園は、やがて道庁に移管され、明治27年(1894)に閉鎖された。今ではすっかり市街化したが、七重小学校前の国道5号線の赤松並木と石垣が

わずかに昔の面影を留めている。赤松は明治9年（1878）の天皇行幸を記念して、湯地らが植樹したものという。

北海道のジャガイモ振興に貢献したまざり1人目の男爵である。

川田龍吉男爵とジャガイモ「男爵」

ここで、もう1人の男爵と「男爵」イモの話題に移ろう。

イサベラ・バードが歩き、湯地が松並木をつくって30年後、その国道を南に1 kmほどもどった道路脇で、明治41年（1908）、世紀の大品種ジャガイモ「男爵」が誕生した。この地にあった川田龍吉男爵の農場が「男爵」誕生の地である。

川田は土佐出身。父小一郎は同郷の岩崎弥太郎を助けて三菱の事務総監を務め、後に日銀総裁になった人で、その功績により男爵に叙せられた。彼はその父の死後、男爵を継承したのである。若いときイギリスに留学して造船工学を学び、帰国後は三菱商会に入社、約20年後の明治39年（1906）に函館船渠（ドック）社長に就任した。

若い時代のイギリス生活がそうさせたのだろうか。川田は洋式農業、とくに園芸に

興味があったらしい。函館に移ると、さっそく近くの七飯村に農地10haを求め、これを「清香園農場」と名づけて洋式農業を実践した。農場には、当時珍しかったトラクターや大型農機が導入され、海外から取り寄せた果樹・野菜・花が栽培された。のちに「男爵」と名づけられた種イモも、そのとき購入したジャガイモ11品種のなかに含まれていたらしい。

川田はしかし、ジャガイモの品種にはそれほど関心がなかったようだ。のちにこのイモが有名になり、出自が問われるが、彼にはほとんど記憶がなかった。原品種名が判明したのは、昭和6年（1931）のことである。北海道農事試験場の宮澤春水・吉野至徳によって、「アイリッシュ・コブラー Irish Cobbler」であることが明らかにされた⁶⁾。ちなみにコブラーとは「靴直し」を意味する。靴直しが日本に渡って、男爵に栄進したというわけである。

ジャガイモ「男爵」の育成者たち

今ではジャガイモの代名詞にもなる「男爵」だが、そのなみはずれた特性を最初に見出したのは、ほかならぬこの農場で働いていた人たちだった。以下、この辺の事情にくわしい館和夫『川田龍吉伝』⁷⁾を参考に記述させてもらうと：

農場に働きにきていた近所の農家の主婦成田キンが管理人の安田久蔵から「これはいいイモだから」と分けてもらったのが、この大品種誕生のきっかけだった。キンが持ち帰ったイモは早生多収で、食味もよく、なによりつくりやすかった。そこで次第に噂が広がり、キンの夫成田仁太郎、子の惣次郎らの手によって、近郷に広まっていっ



ジャガイモ「男爵」と「男爵薯発祥の地」の碑
(絵：後藤決子)

た。最初は「成田薯」などと呼ばれていたが、農場主の川田男爵に因み、「男爵」薯と呼ばれるようになったという。

ここで「男爵」以前の、北海道のジャガイモ品種について述べておこう。北海道では明治30年代に疫病が多発するが、これを機にそれまで普及していた晩生の在来種「屯田」「根室」が衰退した。残ったのは以前から普及していた「アーリーローズ」「スノーレーキ」で、「ヘプロン Early Beauty of Hebron」も広く栽培されていた⁸⁾。「男爵」はこうした品種に代わり、栽培面積を拡大していったのである。

昭和3年(1928)、「男爵」は道の奨励品種に指定される。このころから府県の水稲裏作用としても注目されるようになり、急速に普及面積を拡大していった。目が深く、疫病には弱い、極早生・多収で広域適性に富み、なによりそれまでの在来種に比べて格段と美味なことが歓迎されたのだろう。昭和29年(1954)には全都道府県の奨励品種に採用され、栽培面積9万5000haに達している。

平成12年(2000)現在のわが国ジャガイモ栽培面積は春秋植えを合わせて9万4600ha。その32%、3万haを「男爵」が占める。これからも日本中の食卓をにぎわすことだろう。

おわりに

昨年、七飯町を訪ねてみた。七重官園とジャガイモ「男爵」の故地をみたいと思ったからである。

七重官園は今では道路の松並木と石垣しか遺っていない。官園時代に創設された七重小学校前の、石垣の上の松並木の間に、

七重官園跡の案内板が立っていた。七飯町歴史館も訪ねてみた。館内には官園の昔を偲ばせる農具や資料が多数展示されていた。

官園から南に1 km余り、道路脇の川田の農場跡には「男爵薯発祥の地」の記念碑が建っていた。「男爵」はここから全国に広まっていった。川田が晩年を過ごした北斗市当別の農場跡にも行った。ここには男爵資料館が建ち、農場で活躍していた洋式農具やトラクターが展示されていた。

昭和3年(1928)、湯地定基は86歳で亡くなった。川田龍吉は昭和26年(1951)に95年の生涯を閉じている。奇しくも30年の時を経て、同じ七重の地に居を置いた2人の男爵、だが彼らの名声も、その陰に多くの農家や技術者の支えがあったことを、最後に明記しておきたい。

引用文献

- 1) イサベラ・バード(高橋健吉訳)『日本奥地紀行』平凡社、2000。
- 2) 北海道庁『産業調査報告書』第3巻 1914。
- 3) 七飯町編『七飯町史』七飯町、1976。
- 4) 北海道庁根室支庁勸業課『北海道根室支庁勸業諮問会日誌』1886。
- 5) 浅間和夫 ジャガイモ資料館HP <http://www.geocities.jp/a5ama/album.html>
- 6) 宮澤春水・吉野至徳 馬鈴薯男爵薯の来歴及び特性と、これが生産費に関する調査 農園8(1): 423~432、1933。
- 7) 館和夫『川田龍吉伝』北海道新聞社、2008。
- 8) 山田勝伴 本道馬鈴薯栽培の沿革 北海道農会報5(60): 913~914、1905。